

ピニンファリーナの 全仕事。

TEXT●山崎元裕 (Motohiro Yamzaki)
PHOTO●佐藤靖彦 (Yasuhiko Sato)
COORDINATE●野口祐子 (Yuko Noguchi)
COOPERATION●Pininfarina Extra s.r.l.

多分野で活躍する 精鋭デザイン集団。

フェラーリのイメージが強く、クルマの世界での存在感が際立つピニンファリーナだが、すでに20年以上前からさまざまなジャンルのインダストリアルデザインを手掛けている。その活動を主導するのが、ピニンファリーナ・エクストラ社だ。これまであまり知られていない精鋭デザイン集団にスポットをあてる。

2 006年初めて開催されたトリノ・オリンピック。ワインタースポーツの祭典において、もっとも注目される聖火トーチと聖火台、そのデザインをイタリアのカロツツェリア、ピニンファリーナが担当したことをご存知だろうか。

ピニンファリーナといえば、一般的にはクルマのデザイン、なかでもフェラーリのデザインを長年に渡って担当する存在として知られている。1952年の212インターから始まり、近年ではほぼすべてのモデルのデザインを手掛けており、50

年以上も良好な関係を保ち続けている。最近では、本誌で何度かフィチャーしたP4/5のようなスペシャルモデルの製作も行っている。さらにピニンファリーナは、フェラーリの場合、デザイン分野だけの仕事に終始するが、昔からエンジニアリ

Pininfarina Extra



WINE

イタリアのアスティで150年、5世代に渡ってワインを作り続けてきたGANCIA（スパマンテが有名）とピニンファリーナ・エクストラ社が手を取り合って、ダブルネームのスパマンテ（スパークリングワイン）を発売した。もっとも甘いテイストのAsti、エクストラドライのProsecco、そしてRoseの3アイテムだ。



1890年に建てられた外観を活かし、ホテル内部だけをリニューアル。部屋の種類は、グレード順にスタンダード/ビスタ/シック/インペリアル/フレスカの5タイプで、全部で35ルーム。ラウンジスペースやVIPルーム、ワインルームも設けられている。



THE KEATING HOTEL

アメリカ・サンディエゴにあるキーティングホテルは、2006年12月20日にオープン。宿泊ルームは高い天井とレンガ壁、さらに自然光を採り込むための大きな窓が設けられているという。すでにキーティングホテルのホームページがアップされており、オンラインで宿泊予約（日本語に対応）ができる。
URL= <http://www.thekeating.com>



上写真はインペリアルスイートのCGレイアウト。レンガの壁に加え、ウッド調のテーブルなど、斬新さを追求しながらも、温もりを感じさせるような雰囲気が出されている。小物ひとつにしても、こだわりが感じられ、エスプレッソマシンまで置かれている。



ングに関するノウハウを持ち、車両の委託生産まで請け負うことができているインフラまで完備している。現在は、アルファ・スパイダーやボルボC70カプリオレ（スウェーデンにあるボルボとの合弁会社で生産）を自社工場生産。デザインの提案から始まり、ライン生産に至るまで、総合的にクルマの開発に携わっているのだ。ちなみにピニンファリーナの工場では生産されるモデルにのみ、エンブレムとロゴを組み合わせたお馴染みのプレートが装着され、デザインだけのフェラーリには、ロゴのみが与えられているのである。

が、オリンピックで聖火トーチと聖火台をデザインしたことを意外に思った方も多くかも知れない。しかし彼らはこれまでもクルマ以外のインダストリアルデザインを数多く手掛てきた。公に発表されているだけでも（クライアントの意向で、デザインしたことを公表しない場合もある）相当数の商品デザインをしているため、全部挙げることはできないが、大きさを問わず、それは多分野に及んでいる。小さいものでは、携帯電話、花瓶、ペーパーウェイト、ランニングシューズ、ボーリングの球、アタッシュケース、トラベルケース、ミネラルウォーターのボトル、アイ・ウエア。大きなものでは、キ

ッチン、ベット、ロードレーサー。意外なところでは、ドアノブやジャグジーバスまで含まれる。世界各国の企業とコラボレーションし、日本の企業では、ホンダ（パワージェネレーター）やミズノ（ゴルフクラブ）、カシオ（腕時計）とプロジェクトを進めるなど、オフィス用品から家電に家具、スポーツ用品に至るまで生み出してきた。

しかしこれらの実績は、クルマ関係をメインビジネスとするピニンファリーナ社ではなく、1986年に設立されたグループ企業のピニンファリーナ・エクストラ社が積み上げてきたものだ。日本では、その存在自体こそあまり知られていないが、

同社は、デザイン国イタリアが誇る、クリエーター集団なのである。その精鋭集団を会社創設から率いてきたパオロ・ピニンファリーナは、社長（ピニンファリーナ社の副社長も兼務する）であり、デザイナーでもある。

「86年までは、クルマをはじめ、さまざまな商品をチェントロスティーレでデザインしてきました。それをクルマ関係以外のインダストリアルデザインをする企業として独立させることになり、ピニンファリーナ・エクストラ社が誕生したのです。2005年からは、その棲み分けもより明確になり、「水（ポットなどの船舶関係）」と「空気（航空機関係）」の分野をエクストラ社、自動車、電車、バス、トラック、ケーブルカーなど、いわゆる「土」の分野をピニンファリーナ社のチェントロスティーレが担当しています。



でも、その哲学だけは貫いてきました。我々は流行やファッションにまったく興味がありません。インダストリアルデザインである以上、スタイリッシュやアヴァンギャルドなだけでは通用しないのです。まずデザインを始める前に、依頼

された商品がどれくらいのライフサイクルを持っているかをリサーチします。短くて2年、長くて30年、さまざまですが、いつも心掛けているのは、その期間を考慮しながらも年月が経っても飽きのこないデザインをクリエートすること。もちろん洗練

され、モダンでなければならぬですが、常に根底にあるコンセプトは、クラシックなのです。もうひとつ重視するのは、機能です。どんなに素晴らしいデザインでも、使いづらかつたらまったく意味がない。だからエンジニアリングが

問われるのです。その点、我が社には、クルマで蓄積したテクノロジーやノウハウがありますし、各専門分野に長けたスペシャリストもいます。加えて素材の知識、成形技術なども持っていますから、機能的なデザインを創ることが可能です」

そしてバオロ・ピニンファリーナは最近、自らも参画して新しいプロジェクトを完了させたばかりだ。同僚のイタリア・ピエモンテ州のアステイにある、ワインメーカーのガンチア(GANCIA)社と取り組んだスパークリングワインがそれだ。も

ピニンファリーナ・エクストラ社 プレジデント&CEO

Paolo Pininfarina



ピニンファリーナ・エクストラ社を率いるバオロ・ピニンファリーナは、日本の自動車メーカーとも仕事をした経験があり、数ヶ月だが東京に長期滞在したこともあるそうだ。東京にエネルギッシュな印象を持っているようで、キーティング・ホテルのようなホテルのプロデュースをしてみたいと考えている。



ジャンルを問わないとはいえ、ポータブルハードドライブまでデザインしているエクストラ社。このアイテムはSimple Tech製で容量は40GBから100GBまでラインアップし、カラーコーディネートも手掛けた。アメリカのみで販売される。



ワールドカップモデルに続き、トリノ・オリンピックモデルとして、RANGEとコラボしてつくったスキーブーツ、Fluid。ピニンファリーナの風洞実験施設において、空カテストを行って開発した本格派だ。

ピニンファリーナの全仕事。

Pininfarina Extra



ハイグレードな仕事環境を提案するオフィスインテリアメーカー、Uffix。LUNAは、写真のとおりエクストラ社のセンスが十二分に発揮されているシリーズで、2006年のミラノ国際家具見本市でも高い評価を得た。



世界で初めてジェットバスを開発して名を馳せたアメリカのJacuzzi社からの依頼で、デザインしたバスルームのMorphosisシリーズ。もちろんジェットバスで、マッサージ機能などを搭載している最新型。

イタリアンデザインが世界を席巻する。



Pratist社のG46ピニンファリーナは、先代のG70のコンセプトを踏襲するクルーザーだ。外観はスポーティだが、室内は高級ホテルのスイートルームのような雰囲気、実にエレガントで豪華絢爛。3フロア構造でボルボ製ディーゼルエンジンを搭載する。



イタリアのチェアメーカー、Ares Lineと生み出したXtenシリーズは、ハイエンドクラスのオフィスチェア。アームレストとカラーリングを施したシートバック部分がアルミニウム製で、シンプルデザインながら、とてもスタイリッシュだ。座面とバックレストは、座る人の動きにあわせてショックを吸収する。もちろん、機能性は抜群。



これまで何度も共同プロジェクトをしてきたイタリアのキッチンメーカー、Snaidero。最新モデルが、このVenusだ。イタリア企業同士の仕事だけに、とてもキッチンとは思えない美的センスが存分に発揮されている。

ちろん中身ではなく、ワインボトルのデザインをしたのだが、パオロ・ピニンファリーナにとって、この仕事には、ビジネスを越えた想い入れが込められているという。

「私のおじいさん（パティスタ・ファリーナ）は、1893年にガランチア社があるアステイ近郊に生まれました。私はおじいさんが好きでしたし、アステイはワインの名産地でガランチア社もよく知っていましたから、この仕事が始まった時は、素直に嬉しかったですね。私は彼のことを想い、3種類のスパークリング

ワインをデザインしました。それでもしつかり仕事したつもりです（笑）。普通ワインボトルのラベルは、紙を貼るだけですが、ボトル全体を薄いフィルムで包んで、その上に特殊な印刷を施しています。ボトル上部のコルクカバーは、飲む時に一気に剥がれるようになっていて、これはパテントを取得しています」。

ボトルのデザインといえども、見た目だけでなく、機能も盛り込むというフィロソフィーは、スパークリングワインのデザインにも貫かれているようだ。

さらにピニンファリーナ・エクストラ社は、現在新しい試みに挑戦している。なんと最新の作品は、ホテル、アメリカのサンディエゴにあるキーティング・ホテルのプロデュースを請け負ったのだ。主にホテル内部のコーディネートに依頼されたのだが、1890年に建てられたクラシカルな外観をそのままに、イタリアン・テイストを盛り込んだクラシック&モダンな空間を演出している。宿泊ルームの内部は、レンガを露出させた壁や木製の調度品、モダンなソファなどを組み入れ、まさにデ

ザイナーズホテルといった雰囲気。さらにインペリアルスイートでは、ベッドルームとリビングスペースをセパレートするために、壁を用いるのではなく、その中央にシャワールームを置いた斬新なレイアウトを採用して、いいものだけを揃えただけでなく、空間のコーディネートも巧みに行っている。まさに新しいライフスタイルを提案するホテルとして、彼らの個性が細部に溢れている。

そしてピニンファリーナ・エクストラ社は、最新作品のワインとホテルで見た手腕を、今後も存分に発揮し、デザインという分野で新たな世界を切り拓いていくはずだ。次は、どんなものをデザインして、私たちに驚かせてくれるのだろうか。

TORINO OLYMPIC 2006

聖火トーチと聖火台をデザイン。



トリノ・オリンピックの聖火トーチと聖火台は、ピニンファリーナ・エクストラ社が、そのデザインを担当した。特にトーチは製作まで行い、パラリンピックの分も含めて1万3500本も生産したのだが、完成までの過程では苦労も多かったようだ。冬期オリンピックだったため、聖火を運ぶランナーたちの走る環境が非常に厳しく、なにしろ走っている間に聖火が消えてしまっただけなら、主催者側から求められたのは、100m先



からでも炎が見え、雪が降っても消えない性能。そこで彼らは、このトーチを風洞テストするなど、さまざまな方策を講じ、完成度を高めていった結果、+20度から-20度まで対応し、120km/hの風が吹いても、5000mの標高下でも炎が消えないトーチをつくることに成功したのだ。ちなみにこのトーチはもう在庫はないが、値段は380ユーロ（約6万円）で、一度火をつけると役目を全うしてしまう仕組みになっている。

